

【症例マーク】〔男児 年齢:治療開始時6歳5ヶ月〕

於・St.George's Hospital, Dept.of Child Psychiatry, Clare House
Blackshaw Road, London. SW17, ENGLAND

- ・主訴;カンシャクがひどい。破壊的な行動が目立つ。養父母にまるでなつかない。学校でも他の子らをいじめるなどの問題行動あり。
- ・家族背景;養父母と暮らす。マークはスウェーデン人の実母の私生児。2歳半のとき、1歳下の弟のジェイソンと共に養子縁組された。この時点で彼らは施設収容されていた。「児童保護命令」の措置。日中彼らはこの施設付属の保育所で過ごしていた。養父は経営コンサルタント。養母は元不適応児童の学校の教師。現在結婚ガイダンスのカウンセラーとしてパート勤務。不妊症。他に、生後12ヵ月になるトーマスがいる。同じく養子である。

■資料その1:マークについての覚え書き (日付;1977年7月6日)

・養子縁組の背景;マークがこの夫婦(Mr.&Mrs.C)の家に最初に招かれたとき、彼は極端に不安がって、抵抗した。暴れるばかりで、全然落ち着く気配を見せなかった。そこで弟のジェイソンと一緒にいだろうと判断され、二人一緒に養子縁組となった。それは、日頃彼がジェイソンをまるでぬいぐるみのテディベアみたいに始終側から離さずにいたからであった。こうして新しい家庭に連れてこられた当初、彼は胎児のような恰好で身を屈めて、そのまましばらくの間ずっとしくしく泣いていた。そしてくもう、うんざりだあ(fed-up)・・・>という言葉を出している。養父母の夫婦は、最初の頃どんなにマークとジェイソンの扱いに苦慮したかを語った。彼らは食べ物をグジャグジャにし、果てには床に撒き散らすなどで散々な状態だった。彼らは極度に破壊的で、躰けの難しい子どもたちだった。夫婦は最初の1,2ヶ月間家庭に留まり、彼らと共に過ごしたとのこと。マークは、生後18ヶ月の折に母方のスウェーデンの実家を訪れたときのことをいづらか覚えている。そして、彼の実母とそのボーイフレンド(たち)との間に起こった激しい暴力を伴う争いを日々目にしていたことも・・・。Mr. & Mrs. Cは、これまでのマークとジェイソンとの交流においては肯定的に感じることもあり、価値あるものであったと述懐している。実母との接触は最初の2年間試みられた。だがその都度、後でマークが動揺してひじょうに気分が荒れるため、養父母は子どもたちの実母との接触を断念することに決めた。マークは、実母はスウェーデンに帰国したと思っている。が事実は、彼女はロンドンにいる。現在3歳の女兒がいる。

・学校からのレポート(1976年10月頃);最初は特に目立った問題はなさそうだった。一見してハッピーで活発で聡明な子どもで、いろいろと好奇心も旺盛なふうに見えた。ところがしばらく時を経て、彼のカンシャクが始まり、手に負えないほどにクラス中を引っ掻き回すことになった。実に息をつく暇もないほどにひっきりなしに。誰もが彼に振り回された。彼は、疲れて気難しげなふうで学校にやってきた。そしていかにも先生やら他の子どもたちに対して気を許さず、対決の姿勢を頑なに守った。それはいかにも自分のリミット(限界)を見定めるためといった企てに見えた。カンシャクを起こし、大声で喚きたて

て罵ったり、身体的にも攻撃を仕掛けるといったことがあった。家庭にもう一人新しい赤ちゃんが貰われてきたことで一時期彼は面倒な事態にあった。(トーマスは、当時生後3ヶ月である。)彼は他の子どもたちを情け容赦なしにいじめた。彼は子ども大人を問わず、相手を故意に挑発することがあった。その挙句に、彼はカンシャクを起こすことになるのだった。

彼には多様な関心ごとがある。それは家庭で培われたものであるのだが、博物館巡りといったこと。つい最近のこと、「国立英国博物館」を訪れ、そこで「怪獣」に興味を持った。彼はクラスでの勉強に集中して取り組むことは滅多にない。マークは鋭い感受性の持ち主であり、言語も達者である。だが、彼の集中力は続かない。そこそこ勉強に取り組むには大いに励ましが要る。でも実際それなりに成果があげられたとき、彼は嬉しそうにする。彼は数概念については理解があり、計算には何ら問題はない。彼の問題の一つと思われることは、自分が傷つけた相手に向かって、決して<ごめんなさい>を言えないということだ。自分が悪かったと思う必要をまるで感じていないふうに見受けられる。

・**その他の情報**; ジェysonを嫉妬し、絶えず彼につきまとっていじめる。彼に対して怒りっぽい。ケンカ腰である。彼の手に行っているおもちゃを欲しがり、常に彼に意地悪する。ああだこうだと難癖をつける、そしてケンカとなる。しかしもし他の誰かがジェysonに何かしようものなら、断固体を張って彼の盾となり、弟を守ろうとする。彼のトーマスとの関係はまったくのところ肯定的であり、問題はない。彼は悪夢を見ることがよくあった。睡眠量は多めに必要のようだ。彼は自分の手や腕を噛む癖があったが、今でもまだその傾向はいくらかある。母親は彼がテレビを見ることを制限している。なぜならもしも誰かの身に何か危険が迫っているとか、或いは一人置いてきぼりを食わされるといったことを目にする、彼はしくしくと泣き出すやら怖がるやらをするからであった。彼は母親に対してカンシャクを起こすことはない。ただ彼女の注意が自分から逸れているといった場合には、自分の方を振り向かせるのに、敢えて彼女を挑発することがある。彼は、母親が彼を抱っこしようとする、そうされまいとして彼女から逃げる素振りをする。そしてすぐさま彼女に対して乱暴を働くといったことをする。彼が父親に向かってカンシャクを起こすことはままある。かつて彼に仲良しのお友だちがいたのだが、昨年の夏に突然転校してしまった。それでマークはひどく動揺したようだ。それは両親も教師たちにも一目瞭然であった。それは彼が落ち込んだふうにより一人ひどく閉じこもってしまったから・・・彼の将来の夢は、バスの運転手さんとか。彼は博物館やらギャラリー巡りが好きだ。主治医のDr. Walkから「3つの願い」を尋ねられた折、彼は、自転車、モーターバイク、それに母親の服を作ってあげるのにミシンが欲しいと答えている。

・**補足**; Mr.&Mrs.Cとの初回「保護者面談」が持たれた(1977/07/06)。その折、セラピー開始にあたり、両親に伴われて来た彼にわたしは5分間のインタビューをした。彼はセラピーに通う理由についてはよく承知していた。<ぼくがカンシャクを起こすから・・・>だと。そして、それに付け加えて<ぼく、カンシャク起こすの嫌なの。カンシャクを起こさなくても遊べるようになりたい・・・>とのことだった。治療の動機づけとしては充分といえよう。セッションの開始は1977年7月13日である。

■資料その2;マークの治療についての臨床レポート (日付;1977年9月14日)

わたしはマークと1977年7月13日以降会ってまいりました。週一回のセッションです。夏の休暇のため3週間セッションのお休みが間近でした。それまでに4回のセッションしかありません。セラピーの状況において又しても彼の「オッパイ母親」との「離乳」を再び強烈に体験したことになります。彼の剥奪感が熾烈に蘇ったのであります。思い通りにならない「母親オッパイ」に対して彼の口はバンパイア(吸血鬼)のそれになり、ミルクであろうと何であろうと、それが有するところのすべてを残らず吸い尽くしてしまい、空洞にさせずには済まないといったところでした。因みに、彼の野心はコウモリになることだそうです。まったくのところ彼の狂わんばかりの怒り、そして噛みつくやら吸い付くやら生々しい感情がそのまま「母親オッパイ」におどろおどろしいほどに投影されて(転移上それはわたしにということになりますが)、それ故に毎回セッションに戻ってくることには甚大な恐怖を覚えずにはいられなかったのであります。それは彼の遊戯資料のなかに明白であります。例えば、トンネルで火災が起こった。それで列車は空中に飛んだ。なぜならそのままトンネルに入るにはあまりには危険過ぎるからだとか…。また赤ちゃんカンガルーが「お家」から飛び出したとやら(この場合、「お家 home」とはお母さんの袋ということでしょう)…。しかし、「良きお家」とは自分が戻ってゆくところの「良き母親オッパイ」でもあることが示唆されているようであります。それをよく表している彼の絵があります(図例;1977/07/27)。それはたまたま受付嬢のルーヴィニアが彼の到着に気づかず、わたしへの連絡が10分ほど遅れたことに起因します。なぜか一人で彼はその10分間待合室で待たされていたわけです。彼が描いた絵は風船で、何かに紐でしばられていたのですが突風が吹いてきて、それで空へと舞い上がってしまったのです。その連想というのは、訪れたウインブルドンで誰かが手にしていた風船が手から離れてしまって、それは空を飛んでいき、家の屋根を越えて姿を消したのを見たということでした。風船に「お家」の絵があるのがとても興味深いわけです。煙突からはどうやら煙が出ております。マークはそれについて、中に住んでいる人々が煙で汚れた食べ物を食べなくても済むためなのだと説明しました。これこそが「母親オッパイ」と「父親ペニス=乳首」の「良き結合両親像」になりましょう。でもそれだって気分紛れで当てにならない、いつ姿を消すやら分かったものじゃないといった彼の気分がよく表れております。このことから、マークが母親に身体的な接触ができないこと、それでいて得てして彼女に乱暴にならざるを得ない理由がよく分かります。なぜなら彼の場合、取っ組み合いとか暴力を振るうというのは、自己境界を侵されるといったことの恐怖を取り敢えずかわすことができるからです。この身体の境界が侵されるとは、迫害的で邪悪なる「オッパイ母親」によって飲み込まれ、そして内側に捕らえられてしまうといったことです。これに付け加えれば、彼がまた母親への恐怖からしてエディプス状況を回避せんとしているということでもありましょう。



彼はセッションごとにわたしが姿を現すことに安堵しておりました。「オッパイ母親」としてのわたしがとにもかくにも彼の攻撃に耐えられるだけのレジリエンスを有しているということに気づいてまいります。彼は

「父親ペニス」が「母親オッパイ」に対しての‘授乳する乳首’といったアイデアを抱き始めます。そうしたアイデアにとっても魅了されたのは事実ですが、それはまた彼にしてみれば口唇愛的な性交における両親というカップルに対する羨望および嫉妬心を大いに惹き起こされることにもなったわけであります。例えば、遊戯資料において例証されるころでは、‘黄色いソーセージ’が‘巨大なソーセージ’の中に入り込んだといった空想がそれです。おそらくそこには侵入的に両親の口唇愛的な性交に加わるという彼の目論みが潜んでおります。だがそこで過酷で敵対的かつ懲罰的な父親に出くわすことになり、そこで彼にめちゃくちゃに攻撃され、大きな‘のこぎりマシーン’でズタズタに切り刻まれるといったことになり、それは彼の口唇愛的貪欲さの投影同一化であり、そしてそれが去勢不安を嵩じさせていることは明白です。そこで小さく切り刻まれて切断された彼は「母親のお尻」へとウンチとなって押し込まれて、そして再び怒り狂った羨望に満ちたウンチ・爆弾となって、「オッパイ母親」へ向かって突進するわけです。そしてそれを爆破するわけであります。それが内に抱える、慈愛深き良き「父親ペニス」及び他の「赤ちゃんたち」すべてを殲滅せんがためなのであります。さらに、彼の火を噴くような苛烈な肛門愛的攻撃についていえば、兵士たちとの銃撃戦からしばらくして、ジャングルが猛火に包まれ、そこから動物たちをどうにかして避難させるといったことがありました。彼らを救済せんとしているふうにも一見読み取れるのですが、でもそのうちの殆どが逃避行中に兵士に銃撃されて命を落とすわけです。これも、「外側の子どもたち」、すなわち‘兵士’たちによって「母親の内側の子どもたち」が攻撃され、散々な目に遭うといったことでしょう(1977/07/27)。それから、こんな物語がありました(1977/08/03)。動物園でのごと、檻の中には動物たちがいて、飼育員、すなわち「良き父親ペニス」が餌やりに来るところです。ところがそれが一挙に飛行場に変わります。たくさんのジャンボ機、すなわち「巨大で敵対的な父親ペニス」によって占拠され、当然ながら動物たち(内なる赤ん坊)はすべて蹴散らされてしまうといったわけなのでした。

夏の休暇中、セッションのお休みの間ですが、彼にしてみれば、すっかり消耗しきった「母親オッパイ」(転移上わたしになるわけですが)を置き去りにしたことで、結果的には内側に頼れる良き「母親オッパイ」がいなくなったということになり、そのせいでしょうか、彼は至極脆くて何かと言うとメソメソ泣くといったことがあったようです。そのように母親から報告がありました。たぶん彼は自分の中に良き「母親オッパイ」を無くしてしまったという抑うつ感に幾らか触れたように思われます。そして、そうしたものを自分が必要としているといった自らの思いにもまた…。例えば、微笑する顔のバッジが無くなったとか、クッションのない堅い椅子に座らなくてはならないといったことなど。そうした気付きがあったからでしょうか、彼は実際に母親に支えやら慰めを求めるようになってゆきました。それは以前ですと全然出来ずにいたことでもあります。自らの「内的現実」において何が起ころうとも、それと一線を画した「外的現実」において彼の母親が厳然として存在してくれていることに、どうやら励まされるようになっていったようです。それでも充分コンティン(包容)されていないといった印象が折々に見かけられました。例えば、犬に対して理由もなしにひどく怖がり泣き叫ぶやら、そして自宅内であちこち部屋中にオシッコを撒き散らすといったことです。それはいけないと分かっているのに…。

彼の早期幼少時において、多くのとんでもない変動やら剥奪が事実あったわけですが、それにも関わらず、マークにはその可能性において、尚も健全な成長する能力が備わっていると思われます。そうであっても、それは常に彼の中の自らの成長への意欲が問題になりましようし、それには多大な痛み pain が伴われるものと思われます。

Chizuko Yamagami

■資料その3;マークの治療についての総括的な臨床レポート (日付;1979年9月30日)

マークの養母 Mrs.C は、彼が彼女に対してわざとつれない態度を示し、何かというと頑なに拒絶するばかりで、そればかりか絶えず面倒を仕掛けてくるといったこともあり、胸が張り裂けるようで、悲嘆に暮れることがしばしばあったわけです。彼女はわたしとの初回面談の場(1977/07/06)で、<どうしてもマークと心が通じ合えないんです>と語って、泣いておりました。養子縁組をして以来、この何年もの間(もう4年も経っていたのです!)、彼女とその夫は彼を新しい家庭に落ち着かせようとしてどれほど尽力をしてきたことか。それでも親として自分たちは彼に受け入れられていないという思いで心悩ましておりました。彼らは明らかに深く傷ついていたのです。そして同時に、彼がこれからどうなるかとその将来を憂慮しておりました。それでほとほと困り抜いて、マークに専門的な援助を求めるといったことに藁にもすがるような思いでおられたというわけです。

マークは、その外見は愛らしく、とても魅惑的ともいえる子どもであります。その目の辺りには幾らか警戒心が覗かれましたが。そしてしばしばやや緊張した目付きをし、時々ですが、殊に神経質になっているときなどは、顔をひきつらせピクピクさせるといったチックのような症状がありました。2年3ヶ月の治療期間、彼はわたしとは或る‘距離’を保っておりました。セッションのなかでカンシャクを起こすということも全然ありませんでしたし、わたしに特別な感情を向けるといったこともありません。彼はわたしに対して何らかの感情を向けるのは容易ではなく、とても不器用だったともいえましよう。それよりもむしろ彼はセッションの外で、そうした感情を露わにできる対象を見つけたようであります。彼は受付嬢で若いルーヴニアに恋したようで、大きくなったら彼女と結婚するんだといったことを口にしております!

セラピールームそのものは、彼の心のなかでかなりの意味があったようです。彼の意識にわたし(Miss Yamagami)という存在が認められ、そしてわたしの語る‘解釈’をどうにか飲み込むずっと以前からそうでありました。セッションの度にわたしが待合室に彼を迎えにまいりますと、いつも部屋へ向けて猛スピードでダッシュします。そこで彼は次から次へと、まるでわたしにとっては眩暈めまいを起こすような勢いで、さまざまなことを展開させてゆくのでした。大きな騒音をかなでます。爆撃弾の炸裂した音やら、火山が噴火したといったあれやこれやです。そしてわれわれ二人ともが、そうした渦中であって、さまざまな感覚的興奮、閃光の火花とか、騒音の渦とか、そこらじゅうのありとあらゆるモノたちが衝突を繰り返し、押し

合いへし合いするといったことの中で、もう何が何だか分からないことになるのでした。詰まりのところ、それが彼の最初の6ヶ月間のセッションのあらましであります。こうした有り様において、その深底に根付いた彼の抑うつ感を感じとることは難しいかと思われました。彼がどれほどその生涯において「死」すれすれの崖っぷちに直面していたかということ。彼の「内なる対象」はすべてが無惨にも潰^つえてしまい、彼の心のなかで凍りついた氷の地下室に葬られているといったことなのです。彼らは解放されねばならないのです。でも彼らを信用していいものかどうか。絶対違うと彼は思うわけです。彼らを再び命あるものへと戻すということの格闘が、やがて直に完全な壊滅状態に取って変わられるわけです。解体されバラバラになるといったことに…。それは彼の身体感覚でいえば、「排泄」と同じことになるからです。彼はセッション中のかなりの時間、どうやらまったくこうした身体内の感覚の渦^{うず}のなかに引きずり込まれて、そこに嵌^はり込んで身動きできないといったふうでありました。まるで外界の現実から切り離されて、おそらくは彼の周りにあるものなど何一つ目にしていないもしくは聞えない状態にうかがわれました。それでふとわたしが思ったことは、学校でカンシャクを起こした時に、彼が他の子どもの首を絞めようとするといったことがあったわけですが、こうした場合にも似ているのではないか、つまり彼は自分が首を絞めようとしている相手を殆どまるで見ていないということです。だからそれが誰なのかも…。こうしたことは、マークがどうやら何らかの「強迫観念」^{どりに}の虜^{とりこ}になっていたということがうかがわれます。すなわちそれは、彼が内なる喪失した対象の迫害に抗って、始終必死になって闘っていたということではなかったかということになりましょう。(この場合、「喪失」=不在=見捨てる=邪悪なる何か、といったことであります。)

幾らかそうしたことが整理されてまいりますと、「母親オッパイ」というもの(部分対象レベル)が少し心の内で把握されてまいりました。それらは彼の作画、ユニオンジャック(英国国旗)とかお家(1978/02/08)にうかがわれるように思われます。そしてその「お家」とは時には雪の中に凍り付いて立ちすくんでいるとか、ときには砂漠のなかに放置され熱風に晒されてあるとか、彼の「母親オッパイ」に対する感情というのは実に矛盾に満ちたものでありました(antagonism)。彼の作画「邪悪な巨人」(図例; 1978/02/08)、そこには大きな牙を剥き出しにして彼の前に立ち塞がる巨人がいて、その背丈は途方もなく、なんと2千フィートにもなり、その髪の毛一本でも馬たちを20匹ほども抱えあげられるといったほどの怪力の持ち主なんだそうです。この巨人に出くわした「誉れ高き馬「チャンピオン」」(すなわちマークそれ自身)は手にする「のこぎりマシーン」でもって対決を挑んだわけですが、それは実に血に塗^{まみ}れた惨劇と化しました。彼は一蹴りして高く飛び上がり、その巨人の首をバツサリとちょん切ります。そのからだのあちこちから猛烈な血飛沫^{しぶき}が飛び散りました。これは彼の早期の授乳なるものがどんなものであったのかということも如実に示しているように思われます。絶えず欲求不満を強いる、迫害的で悪意ある「母親オッパイ」と「父親ペニス」の「結合両親像」であります。それが執拗に彼のところに刻まれ、今尚も決してその記憶から解き放たれてはいないということになります。もう一つ、彼の作画に、海の深底の

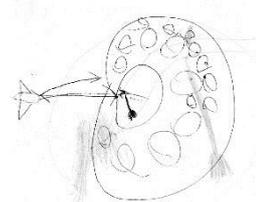


「氷ついた街 frozen city」がありますが、そこには2匹の馬が鎖につながれており、それで彼らは‘氷’を食べているといったことです(1978/02/21)。これはスウェーデンに帰国したと聞いている彼の実母とそのボーイフレンドについての記憶の身の毛のよだつような極めてぞっとするような何かを示唆しているかと思われるのです。この場合2匹の馬とは、彼と弟ジェイソンかも知れません。かつて彼らが凌いできた幼少時の心的外傷がどれほどのものか知る手がかりとも言えるかもしれません。

それは確かに断じて負けてはならないということ。敗北はそのまま死を意味していたわけですから、死にも狂いの苦痛に満ちた格闘であったわけですから。例えば、彼は悪夢を語ります。〈・・・幽霊みたい・・・でもやはり違う・・・犬だ。吠えてる、吠えてじっとこちらを睨んでいるの、闇の中で・・・こんな具合に・・・でも夜中に目覚めると、誰も周りにはいないの。皆寝ているんだもの・・・〉と。それから紙でつくった‘鷲’を空に飛ばします。それが床に落ちた時、彼は〈ぼく、殺しちゃった〉と言いました。そしてすぐに何やら口のなかでもごもご呟いております。〈ぼく、落ちちゃうのかな。いや、落ちたりなんかしない。ただどこかに消えていなくなるのかも・・・〉と。それですぐに彼は窓台(敷居)に攀じ登り、そしてそこに窓の外側と内側の両方から足を預ける恰好で立っておりました(1977/03/08)。〈ほらね、へっちゃらだろ〉と言わんばかり。でも勿論内心では‘死の淵’ぎりぎりといったところです。ここに普段何かいうと事故に遭いがちな(accidental-prone)マークのぎりぎりの追いつめられた心情がうかがわれます。やらなければやられるということに囚われているわけです。しかしながら、母親から報告されたことなのですが、マークは誕生日を迎えた日のこと(彼は7歳になりましたが)、いつもだとカンシャクを起こして、それで罰としていつも彼一人だけベッドに行きなさいと言われるのですが、初めてそれがなかったこと。そして男の子たちが全員揃ってくわれわれはC * * ファミリーだあー〉と誇らしげに何度も歌って喜んだとのこと。家族として一緒に育っているといった感覚がうかがわれます。そしてマークと母親との間で関係がかなり改善されていることも報告されました。確かに彼は母親を認め始めたようです。彼女の傍らに身体的に寄り添うことが苦痛ではなくなったようです。詰まりのところ、彼はようやくにして愛着対象としての母親を見つけたといっていいでしょう。

こうしたことがあって以降、彼は‘愛着’というものの性質を探索する段階に至ったと思われる。同時に‘母親のからだ’をめぐるの地理的な混乱 geographical confusion についても整理してゆくようでありました。そして「母親オッパイ」は、今や「父親ペニス」との関係性において幾らか性的な意味合いをも含むようになっていっております。父方の祖母の死に刺激され、そして復活祭の休暇が間近になったこともあり、彼は「アニゴンAnigon」(宇宙生命?)といったものを考え出したのです。それについて彼が語るには〈・・・それっていうのはね、先生とか自分、つまりみんなを創るものなの。それでもし死んだら、‘アニゴン’に生まれ変わるわけ。それから草になったり、家になったり、・・・他の誰かになったりもするしね・・・〉と。偶然ながら、彼の養母の名前はアニーなのです(!) 確かに懸命に「生」そして「死」というものがどんなものかということを知ろうとしていたのです。そしてまた「両親の性交」といったことについてもそうです。或る時彼はこんなことを言いました。〈あのね、お父さんのおちんちん willy がママのからだを突き刺すとすると、それがママのお腹に何かしら与えるわけ。それでね、それが誰かに大きくなるってこと

だよ>といったふうに・・・こうしたことを語ったその日に彼は絵を描きます。サンダーバードが月の周辺をぐるぐる回っていたのですが、或る事故が突発し、それでそれは月面のクレーターに落ちちてしまうといったことでした(図例; 1978/03/13)。どうやら「両親の性交」とは彼のころのなかでは何やらひどく剣呑なものであって、<母親ヴァギナ=肛門=クレーター=お墓=休暇



によるセッションの中断>といったことなのでしょう。そしてさらに、彼はお父さんのペニスと自分のとを見



比べてその違いを認めることもします。彼の遊びに「ガレージ・マン garage-man」というのがあります。それは古びてしまって使えなくなった車のエンジンを清掃して修理する人といったことのようにです。それで彼は、車庫に車両を運び入れるわけです(図例; 1978/03/22)。つまり‘車両(=母親オッパイ)’に休息を与え、点検整備といったことです！それで、彼はさも忙し気にわたしのテ

ーブルの上も下も丁寧に濡らしたブラシで拭いてゆきました。それが復活祭でお休みを迎えた直前のセッションでした。ここに「修復する父親ペニス」の撮り入れがうかがわれましょう。

そして休暇から戻ったとき、すぐさま彼はドルハウスの中にあつたオモチャの象に目に付け、ひどく腹立たしげに<おまえさんはほんとにいけ好かないやつだ・・・>と言い、あっちへ行っちまえと言わんばかりに急いでそれを取り除いたのです。それはすぐさま何だかメチャメチャな事態がなっていました。大混乱の極みといったところですよ。どういうことかという、<ほら、お家が燃えているよ>と叫びます。そして何もかもがメチャクチャになったというわけです。ここでの問題というのは、彼は「父親ペニス」とのエディプスの格闘において惨敗であることを自ら確信したかのようで、それがつまりのところ放逐^{ほうちく}、その果てには死が待っているとといったことのようにです。<ママとパパはぼくのこと要らないって思ったのね。それで売り飛ばしてしまったわけなの。それで彼らは翼(飛行機?)でもってどこかへ飛んで行ってしまったというわけ。充分な空気が(つまり食糧もしくは空間の意味か?)がないからなのね。ぼくたちってラッキーだと思ふよ。だってたくさんのおもちゃたちはそれで殺されているんだもの>(1978/04/12)。そんなふうに彼は語りました。それに引き続き、セッションの中で、かなりの期間、「父親ペニス」へのかなり猛烈な攻撃が繰り返されました。それは徹底したものでありました。例えば、2つのオモチャの象がお互いの鼻を巻きつけ、戦っていたわけですが、それでそのうちの一つの象の鼻がへし折れたのです。そして工作用のモビールの棒があつたのですが、それらすべてを細かく切り刻み、ビーカーの中に詰めて水で浸してしまうのです。これは詰まりのところ、母親の胎内は「壊れたペニス」がいっぱい詰まっただけのガラクダだと彼は言おうとしていたようであります。ここにはまた、養母アニーが不妊症であり、それで自分を役に立たない子宮で、ただの血塗^{まみ}れのごみ溜めだといった彼女の思いがもしかしたら反映されていたのかも知れません。

1978年5月から1979年の1月の間、特にセッションがお休みの休暇中、「良い」そして「悪い」といった概念は彼のころのなかでは大いに悩ましい課題となっていました。これら2つの違う‘内的な力’は彼のさまざまな遊びのなかで徹底して壮絶な戦いを繰り返すことになっていったわけです。それは

映画「スターウォーズ」の伴奏曲付きといったところでしたが。彼の幼児的貪欲さそして侵入的な攻撃欲が空想レベルでアクティングアウトされる必要が大いに見受けられます。それでそれらをどうにか克服し、もしくはそれに耐性ができるようになれば、いつか良き父親の後を引き継ぐことができるようになる、そうした意図が彼にあったといえましょう。それはなかなか肯定的 positive に見えました。母親からの報告によりますと、彼が他の2人の弟たちを率いて庭掃除を先頭に立ってやったとのこと。それは、父親がビジネス旅行で海外に出張して留守の間のことでした。しかしまたセッションの中で、彼はわたしがカーテンの裏側に隠して置いた鍵の束を使うことの誘惑を退けることが難しいのでした。わたしの隙を見てこっそり手には扉を開け閉めしたり、もしくは閉じてあるロッカーを鍵で開けようしたりするわけです。ここに父親と張り合う「小さなエディプス」の彼がうかがわれます。或るセッションでは、彼は違法駐車のを撤去する仕事をする人になりすまし、わたしの所有物をありったけ分捕り、遁走し、それでわたしの手許には何も残らない、つまり空っぽにしたりしました。他のセッションでは、彼が今やもう公然と自分が‘押し込み強盗’であることを実演してみせたのであります。赤いペイントを手に塗り、それで盗みの現場に堂々とその赤い指紋を残しました。窓ガラスにぺたぺたとそれを付けます。いかにもどこもかしこも血^{まみ}塗れたふうに見えました。それは恰も毎回「ドラキュラ・マーク」がお棺から立ち上がり、セッションに訪れてくるといったふうには思えたわけなのです！クリスマスが間近になった頃、母親からの報告では、彼が貪欲さをいっそうエスカレートさせており、それもとことん際限のないあり様でした。もしもジェイソンもしくはトーマスが何か欲しいと言え、彼もすぐさまそれに同調して自分も欲しいと言いますし、彼は実際のところすさまじい勢いで物を食べるんだそうです。まるで食べ物を口いっぱい掻き込まんばかりに…。この時期、わたしは彼の顔にいっぱいの引っ掻き傷を認めました。彼が何やら心掻き乱す興奮した状態において、恰も彼の指先の爪が無意識に何かに向けて穴を掘ってゆくようであります。おそらくそれは母親の‘内側’でしょう。それは彼のこころの中ではありとあらゆる食べ物やら品々が隠されてあるところだからです。彼の飢餓感を決して充たされることがなく、実に底無しです。或るセッションでは、洗面台にオモチャの兵士たちが、そして獰猛な動物たちも、また家族人形たちも一緒に水に浸かっておりました。それは何が何だかもうグジャグジャです。明らかに彼らの間で殺し合いが延々と続いているようであります。それでわたしがその殺し合いは何のためなのかと問うと、彼はただ一言<…食べ物だよ>と答えました。そしてそのすぐ間もなく、彼はそれらを洗面台から取り出してそれら‘死体’の山を作ったわけです。実に「死」は至るところにあったといえましょう(1979/01/22)。

しかしながら、興味深いことに、彼はセッションの外では随分と成長しておりました。落ち着いてきて、いかにもまともになっていったわけです。学校からのレポートを見ますと、「とても優秀 excellent」ということでした。そして他の子どもたちとの関係を見ても、クラスの中で彼は受け入れられているようです。例えば、或る朝のこと、マークは少し遅れて到着したんだそうです。そして彼が教室に入ると、すぐさま他の全員が一斉に振り向いて、喜びで顔を輝かせたんだそうです。そのように母親が報告しております。マークが他の子どもたちの心の内に居場所を見出しているということを証していることになりましょう。それはどうやら皆が「理性ある righteous 自己」というものを有している誰かとして一様に彼を認めているら

しいのです。或る時、彼は他の一人の男の子を校長先生のところへ引き摺って連れて行ったんだとか。それはその子が何かしらよからぬことをしたということだったらしいのですが。まるでマークは「保安官」といったところでありましょう(1979/01/31)！彼は1979年2月には「カブ(註;ボーイスカウト団の年少隊)」に入団しました。それ以来そこではそこそこ十分に上出来と評価されておるようです。家庭内では全体に‘高揚した気分’が伝わってまいります。どの子も健やかに伸びていっております。殊に母親の心のうちでは、‘家族の未来’というものをようやくのこと思い描くことができるようになったようです。

この頃、わたしは来る9月には退職する旨彼らに告げました。それからというもの、わたしとの別離、そしてセッションがもうなくなるといったことで、彼の心の中の古傷が疼いたかのようでありました。突然彼は事故に遭うことが頻回になりました(accidental-prone)になりました。お気に入りの受付嬢の退職を耳にした翌日、彼は扉に指を挟んで傷つけました。それも故意にであります。母親がそのように報告しました。その上に、復活祭の休みの間、階段から落ちて、なんと救急車でセント・ジョージ病院へ搬送されるということがありました。セッションに戻ってまいりまして、彼は頭を割られる手術をしたと語り、つまりその落下の際に階段の下にあった温風器に頭をぶつけて出来た頭の傷跡を縫った証拠として、まるで勲章みたいに、その縫った糸を瓶に入れてわざわざわたしに見せるのに持参してきました。事故は母親の友だちのお宅で起きました。母親はわれわれのところのソーシャルワーカーとの面談のためにマークとジェイソンをそちらに預けて出かけてきたわけです。マークが語るのには、彼はジェイソンと一緒に駆けっこしていて、ジェイソンが水鉄砲で彼を追いかけてきたので、逃げようとして階段の上のカーペットで足を滑らしたとのことです。そして落ちるときに、彼は女の子(その友人宅の子ども)を倒してしまっただけですが、でも彼女は怪我はしなかったとのことです。彼にひどく怒ってはいましたけれども・・・。そうしたこのようです。そして彼は自分の額に傷跡があるのをわたしに見せました。そんなに大きなものではありませんでしたが。彼はたくさんの血が流れたということを語ります。セッションの打ち切りを聞かされて、彼はここで再びとんでもない‘茫然自失’に遭ったといえましょう。それは実母との間で引き離されたときに感じたものでしょう。茫然自失が再びぶり返したということは明らかでありました。それは目の前が真っ暗ですべてが唯死んでいるといった感覚なのでしょう。それは時期的にととも間の悪い時期であったといえます。学校は子どもたちに対して‘コンテニングの機能’を失っておりまして。彼ら学校の教員たちはストライキ中だったからです。何日か授業のない日がありましたし。そして当然ながら、こうした不安定な落ち着かない雰囲気は子どもたちに影響しないはずはなく、実際のところ、昼食の間、子どもたちだけで、誰も監督する教師がいませんでした(そのことは学校側がストライキの一環としてそのように決定していたからです)。子どもたちの間でケンカが起きました。そしてケンカが起こるたびに、マークがトラブルを惹き起こしたと非難されたわけでありまして。そして校長先生にお小言を貰うことがあったのです。それも彼にしてみれば不当だと思われたのですが、いずれにしてもこの状況下ではマークが自分を正当化する試みは虚しいものだったといわざるを得ません。そして校長先生の不当な断罪に対してマークが彼のネクタイを引っ張って抗議したということがあり、それで彼の昔の悪い評判がぶり返されたようで、学校中の誰もが彼に敵対的になったのでした。職員会議ではマークの退校処分すらも議論されたほどでした。彼がわたしとのセッションを終わりにするにあたって、かなりの困難が想定されましたので、

わたしはセッションの回数を週2回に増やすことを提案しました。彼の両親はそれを承諾しました。しかし学校は2,3ヶ月の争議を経て、どうにかストライキも一件落着となったようであり、安定を取り戻したのであります。マークは特に問題だと見做されることもなく、そのまま彼は留まることになったようでした。

ここでマークの父親から5月30日付けの手紙がわたし宛に届きました。それは妻アニーの妊娠が確認され、もう一人赤ちゃんを迎えることになるとの嬉しい驚きのニュースでした。そこで家族は真に新しい段階を迎えたということになります。この日、彼はセッションのなかで、崖から落ちた石を除去して、そこに新しい街を建設するという考えに没頭しました。それを砂箱のなかで展開してゆきました。彼は新しい人々が移住するための開拓地ということを考えておりました。そこでは「夫 husband」なるものの役割、その働き」といったことがあれこれ考え始められています。それを徐々に彼は遊びのなかで具体性を帯びた考えとして展開していったのであります。試行錯誤しながら・・・そんなふうにして、キャベツやらジャガイモが植えられた畑ができました。セッションの間にしばしば彼は、「ジョゼフと約束の地」という歌を口ずさんでおりました。でも彼のなかで「良き夫たるところの父親」に対する信頼と愛情とが揺らいだときには、彼の「約束の地」のイメージは地震のせいであれに大地に割れ目が出来たとやら、惨憺たる状況になるようでした(1979/07/06)。それはまた「駐車場」を創るといった構想にしてもそうでした。そこには広大なスペースがあり、車にはまだまだ空きスペースがありましたし、警察が特別に陣取っており、その中では重要な位置づけがされていたようでしたが、結局のところ、何かしら理由も判然としないところで一瞬にして崩壊してしまうのであります(1979/07/09)。

或る出来事が報告されました。学校でマークがわざとピンをボールに突き刺し、それをパンクさせてしまったのです。そして彼はひどく不安がって、担任の先生に「お母さんがぼくのことひどく怒っている・・・」と訴えたのです。そして母親に学校からその旨連絡があり、それは事実と違うわけですから、彼女はとても喜ぶどころではなかったのです。それでマークを叱責し、余計な騒ぎを起こした罰としてベッドに行って一人おとなしくしていなさいと追いやられたというわけなのです。これは勿論のこと、母親の妊娠、その日々張り出してくるお腹そしてその内なる赤ちゃんに纏わる彼の敵対感情に関連づけられています。マークが自らの無意識的破壊欲をよく読み取っていたということが驚きです。そこで結局のところ、彼が本当のところ何を怖がっていたのかということがこれで判明しました。つまりのところ「放逐」であります。たとえそれが今回のように、ベッドへ一人追放されるといった、一時的なものにしろ・・・。

彼のセッションの中で、遊びを通して彼の空想が語られました(1979/07/16)。オスのカンガルーとメスのカンガルーとの間にとり組み合いが起きておりました。(この時点でメスのカンガルーの袋には赤ちゃんカンガルーがおりました)。マークが語りますに、「彼らは結婚するのにとり組み合いをする。セックスする(make love)わけなの」ということでした。しかしメスのカンガルーは逃げてしまいます。なぜなら彼女はセックス(intercourse)をすることを厭がったからです。赤ちゃんはもう一人いましたし・・・。赤ちゃんカンガルーは実際、このとり組み合いの最中、オスのカンガルーに噛み付いておりました。それからしばらく間を置いて、たまたまその赤ちゃんカンガルーは排水路に落ちてしまうのです。そして流れに飲み込ま

れ、そのままスウェーデンの岸边まで流されてしまったわけですが、直にオーストラリア(そこが彼のホームでしたから)へと超高速ホバークラフトに乗せられて連れ戻されることになったというわけです。そしてもう一つ、赤ちゃんカンガルーについて続きのお話があります。岸边に近付きますと、突風が起こり、嵐が来たようです。それで彼の腕が折れてしまい、そして血があちこちに飛び散ったのであります。結局それで母親カンガルーにも父親カンガルーにも再び会うことはできなかったというものです。これは実にとてもつらいことであります。彼は懸命に心の内で「愛」に辿り着こうとしていたのです。それなのに決して幸運には恵まれず、何もかもがほんとツイテナイわけです(1979/07/16)。セッションを訪れた彼は眼の辺りが黒ずんでおりそして鼻が赤く腫れておりました。彼が言いますに、仕掛けの罫のゲームをして遊んでいたら、たまたま彼がそれに落ちてしまったんだとか。彼はくそれでね、ぼく、鼻が折れたし、息が出来なかったんだ・・>とのことでした。事実彼のハートは満身創痍といったところでしょう。絶えざるしつこい疑惑に悩まされていたのです。それは或る日の遊びで、2匹のペンギンが北極クマを頻りに小突くといったことにも表れております(1979/07/27)。学校は夏休みに入ったところで、彼の担任の先生がアメリカに行くとかでお別れだったのです。彼にしてみれば先生とのお別れはとてもつらかったのです。また見捨てられた・・と内心幾らかそんなふうに思ったみたいでした。

或るとも興味深い出来事が母親から報告されました(1979/07/20)。それは夕食時にマークが不意と彼女に向かって、自分がかつてママのことを叩くことがあったかと訊いたのです。それで<そうよ>と返答します。そして当時はいろいろあって彼が幾らか混乱していたということを語り、そして他の二人それぞれについても、違った意味ではあったにしても混乱していたということを語ったとのことでした。すると、マークが立ち上がって彼女のところに来てキスをしたんだそうです。すぐに二人の男の子たちもそれに倣い、同じくお母さんにキスをしたということでした。それからまた、これは 1979/09/03 に報告されたことですが、トーマスが‘想像上のお友だち(imaginary friend)’を作っていることを見て、それはベンという仲良しが最近引っ越してしまったので、悲しがつてそれで夕食のテーブルに彼専用の椅子をこしらえていたわけですが、ごく自然にマークは母親に、わたしのこと(Miss Yamagami)についても同じようにするつもりだ(わたしがいなくなればという意味)と言いつまり‘想像上のお友だち’にするというわけ!)、それから私がもう1年病院に留まってくれたらいいのに・・とも語ったとのこと。それは自分がどうやったら混乱した思いにケリを付けていいやらまだまだよく分からない、心もとないからといった理由でした!

ほんとうに、夏季休暇を終えてセッションに戻ってきた彼は、心の内の‘混乱 muddle’とか‘矛盾した感情’ antagonism’などをあれこれごっそり持ち込んでまいりました。それで大いに思案を巡らせるのでした。家族に新しい赤ちゃんがやってくるということについて、その赤ちゃんはどこで眠るのかとか、そしてまたわたしが将来、別の新しいのちを産み出すといったことも・・。例えば、砂箱のなかで、お魚さんたちのための水庭を作っておりました。それは綺麗な水で充たされておりました。ところが残念なことに、車が路上から外れて崖下に落ちてきたのです。その挙句水庭にまっさかさまに墜落したというわけです(1979/09/07)。そしてこのすぐ後、彼は赤ちゃんのお魚さんのために砂箱の隅に庭の池を作りました。彼らが大きくなったら大きな方の水庭へと移すということです。しばらく間を置いてから、実際にそうして

やりました。それでそこにがっちり防護柵としてバリケードを廻らせます。高速路から車やモーターバイクがスリップして飛び込んでこないためにであります。そしてさらにこんなことも・・・モーターバイクが耳をつんざくような騒音を鳴らしながらグルグルとサーキットを走るというゲームに夢中になったあとで、彼はそれを止めて、それをすっかり新地に戻します。新しい市街を建築するんだとのことでした。ロンドンのように・・・ハイウエーもあり、家並みもあります(1979/09/10)。さらにはお魚さんの池を作るのに、レンガで砂箱のなかにきっちり積み上げてゆきました。ところが、それが仕上がったところで、カーレースのサーキットが予定されているからという理由ですべて取り壊されてしまいます(1979/09/17)。建築、破壊、建て直し、そしてさらなる取り壊しといった連鎖反応が果てしなく続くようでありました。

ついに最終セッションとなり、まさしく彼の‘車の運転(ハンドル捌き)’の力量が試されていたこととなります。心のなかで何やらまだまだ危なっかしい思いがあったのでしょうか。それでそれに対処すべく彼は奮闘しておりました。それが別離の最後の瞬間を迎えて、とても感動的に描写されております。それは「熱処理(temperature control)」ということです。すなわち、自動的に‘熱’をコントロール下に置くということ、‘冷たい’から‘あたたかい’、そして‘熱い’、そして‘とても熱い’へと、そして‘煮えたぎっている’、そしてそれはまた‘冷たい’へ戻ってゆけるわけです。他にも彼は車についての知識をあれこれ仕入れたようです。ギアがあり、アクセルがあり、ブレーキがあり、石油を入れるタンク、それにカーラジオもあります。それでとてもすてきな音楽を聴けるのです。そこにTVだってあります。そして、とうとうセッションの終わりの時を間近にして、彼は「カントリー・モーターレース」を展開させておりました。ゴール寸前の2分前に彼はその2分間に残りの油5ギャロンのすべて使い切ってしまうと思ったのです。しかし彼は自分にくそれって、おバカさんのやることだ・・・>と叱りつけます。そしてゴールに近付くと、わたしたちのセッションはそこで終わりとなっております。彼はそれですべてを吹き飛ばしてしまいます。彼は<・・・死んだね>と呟きます。(おそらく運転していた自分のことを言っているのでしょうか)。そこでわたしは、<いや、そうじゃないでしょ。わたしたちのどちらも死んではいけない。われわれのどちらも消耗しきって、もはや空っぽということでもない。君も、それにわたしだってそう、これからもまだまだ生きて、やらねばならないことを続けてゆくでしょうよね。どうかしら・・・>と彼に語ったわけでありました。

そして結局のところ、どうやらわたしとの別れも彼にとってそんなにひどいクラッシュ、つまりとことん打ちのめされ、お先真っ暗になったわけでもなかったみたいです。待合室に戻り、わたしと母親とが挨拶を交わしている傍らに立ち、彼はちょっと恥ずかしげなふうに、でもとても情愛を込めた笑顔をわたしに向けて<さよなら>と言い、幼い弟トーマスの手を握って、彼を引っ張ってというか彼に引っ張られてというか、一緒にとこと小走りに駆けてゆきました。その彼らの後ろ姿を目で追いながら、母親は少し涙ぐみながら、名残惜しそうにわたしに手を振って<さよなら>と言い、やがて子どもらのあとに従ってゆきました(1979/09/28)。

マークの養父母 Mr.&Mrs.C との最後の面談において(1979/09/21)、われわれ一同はマークがこの2年間でどれほど成長したかということを確認、喜びを分かち合ったのです。<まるで違う子どもみたいだ

わ・>とは母親の言葉ですが・。マークは穏やかになりましたし、学校で他の子どもたちとの間で自分の居場所を見出しているようです。そして家庭内においてもまたそうです。それで、わたしとしては特に申し上げることもなく、たゞいづれ彼が青年期に達した際におそらく自己アイデンティティーの危機ということが起こりうるでしょうから、そうしたとき親御さんとして彼に援助してあげられたいですわねと、ほんの少しだけ助言しただけで済みました。

最後に、ここでわたしはまずMiss Jeni Webster (PSW)に感謝を述べたい。この2年の歳月を通して一貫してマークの治療を援助していただきました。特にマークが大変難しい状態にあったとき、彼の母親をしっかりと支えてくださったことで、わたしもマークも治療に専念できましたわけで、そうしたサポートは実に得難いことに思っております。そして、またここにDr. David Walk (コンサルタント・精神科医)に対しても感謝を述べておきたい。学校でマークが深刻なトラブルにあったとき、学校当局と連絡を取り合い、問題の処理に当たってくださったことで大いに助けられました。振り返ってわたしもマークもどれほどのご支援をいただきましたことかを思い、改めてただただ幸運であったと思うばかりです。

Chizuko Yamagami
(Child Psychotherapist)

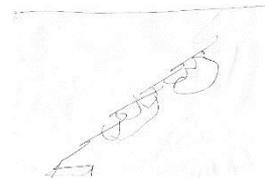
■ 後記 — 「死の衝動」との闘いを共にして —

われわれクライン派は「死の衝動」というものにこだわる。その概念はフロイトから引き継いだものであるが、もっと臨床的に一人ひとりの子どものなかにある「いのちの危うさ・脆さ」に肉迫したものであった。その先鋭といえるのはまず誰よりもMrs. Esther Bickが挙げられる。彼女の子飼いの弟子たちの臨床活動にはそれが紛れもなく散見される。特にジーン・マガーニャの論文(2002)を参照されたい。

この「死の衝動」という概念を具体的にイメージすることは簡単ではない。たとえばこんなふう・。ガタガタとからだに震えがきて、そのうち目の前が真っ黒になる。怯えがからだをすくませ、硬直する。何も感じない。ただ途方もない脱力感、感覚の麻痺。そして何もない Nothing! なのだ。そして意識を失う。やがて奈落の底知れぬ闇に向かって沈んでゆくだけ・。だが、そこにもしも‘一蹴り’があり、浮上し息継ぎができたら・。この内なる、沈んでゆきそしてやがてばらばらに解体する‘自壊’する己自身に抗うもの、この内なる‘一蹴り’、つまり攻撃欲が挺子となるのだ。この「生の衝動」を押し上げる破壊衝動を、メラニー・クラインは彼女の臨床の子どもたちに求めた。殊に「症例ディック」(1930)がそう・。わたしたちクライン派とは、そうした彼女を引き継ぐ者たちなのである。すなわち、「生の衝動」そして「死の衝動」のせめぎあい、その熾烈な闘い、すなわちアンタゴニズム antagonism を止揚せんとする。ピオンの

いうところの「コンテインメント」がそれであり、わたしが提唱するところの「贖いの器」もそうだ。人間になるとはどういうことなのか？ 問い続けてゆかねばならない。

わたしは、この幼い6歳の男児マークとのセッションのなかで、その死に物狂いの内的格闘が証されるのに立ち会ったのだと思う。或る日のこと(1978/02/21)。彼はこんなふうに^{むさぼ}貪り食う話をしていた。〈ぼくね、ありったけの食べ物をガツガツ食うんだ・・〉と。(これは、母親から報告されていたことでもあり、事実である。)それって結局どんなフィーリングなのかなと問うと、〈何も、ハッピーでもないし、悲しくもない、全然なの。感じるって暇もないわけ。ただ貪り食うだけなんだ・・〉と返答する。そして彼は紙にペンで殴り書きをする。明らかにそれはインクがもうなくなっていないかどうかを確かめている。・解釈:「もしかして自分の取り分の食べ物がどんどん少なくなってゆく、だから早く早く食べてしまわなきゃという思いなのかな・・。」



すると、何やら飢餓感を触発されたか、絵を描く。図画その1;水底に2匹馬がいる。そこは「凍えた氷の街 frozen city」なのだと彼は語る。〈馬たちは鎖で足を繋がれていて、身動きできない。逃げられない。それでね、‘氷’を食べているの・・〉。・解釈:「次の子ども(患者)のこと言ってるのかな? マークがここに戻ってくるまでに誰かが来るんだけど、セッション(=食べ物)のお預けくっているわけね。もしかしてマークがそのお預けくっている患者ということかしら? そのときの気持ちを言ってるのかしら??」



そこで、ほどなく彼は図画その2を描く。潜水夫 diver の絵。〈男が水泳パンツを履いてるだけで、‘twig(杖もしくは棒?)’を手にしているの。(シュノーケルのことか??)・・フロッグマン(蛙男)で、おかしな男、水底に住んでいる。水を呼吸している。空気ではなくてね・・。(どうして?)波が twig を流してしまうからなの。だから水の下に沈んでいるわけ。時折水面に顔を出すこともあるんだけど。だけど、大丈夫、何とかなる。肺を2つ持っているし、‘空気’をからだのなかに貯えているから・・〉と語る。どんなフィーリングなの?と問うと、〈彼はすぐに‘マーメイド(人魚)’になるんだ。じゃなくて‘シーマン(sea-man)’だ。最初に尻尾が出る。足はないの。呼吸している。(どうやって?)ほんのちょっとの間だけ、彼は twig が要る。だけどフゥーと息を吐き出すの。それで水のなかで呼吸ができるようになるわけ。twig がなくてもね・・。大丈夫。嬉しげに泳いでゆくんだよ・・〉といった話。

これをどう解釈したらいいのだろうか? メラニー・クラインのいうところの「Memories of Feeling(感情の記憶)」の断片が彼のなかで継ぎ接ぎされて、ゴジャゴジャになっているとも言える。でもとてつらく、そしてせつないものが伝わってくる。「死の衝動」との内的闘い、そして「自己救済への途」を死に物狂いに尋ねあぐねているといってもいいだろう。それにしても、この「氷の街」の苛烈さには衝撃を覚える。わた

しは言葉を失った。多くの子どもらが飢餓やら虐待で死に絶える現実がある。それは確かにそうだ。イギリスの作家チャールズ・キングズリーの子ども向けおとぎ話「水のこどもたち(The Water Babies)」みたいに…。マークはそれを‘マーメイド’とか‘シーマン’とか言っているが、つまりは誕生にはまだ至っていない‘命たち’ということだろう。おそらくそうなんだろう。この世での居場所はまだ見つかってはいないようだ。生きた血も、そのぬくもりもまだ手にし得ないといったことなのだろうか。喜びの涙で迎えられること、それもまだまだ彼にとっては遠く、手の届かない彼方の向こう。この世に自分の居場所があるや否や定かではない。まだ彼の人生は封印されている。その圧迫感に耐えている。‘氷を食べている’というのがどんな気持ちなのか、彼にしか解らないだろう。実にづらい、そしてせつない。それにふと思う。もしかしてここで彼は「出産の記憶」を物語っているとも考えられなくもない。彼のいうところの‘twig’が絵の中ではどうやらお腹つまり臍の辺りに引っ付いて描かれていることが妙におかしい。それは‘へその緒’のことなのだろうか。誕生時のそれから切り離される衝撃、それから生きんがための死に物狂いの格闘。つまり呼吸すること。まさにこの世で、最初の食べ物、つまり‘空気’を彼は語っているのだろうか？確かに絵の中でこの潜水夫のライフライン(命綱)を辿ってゆくと、そこには‘門’のようなものが描かれている。胎児が外へと押し出される、その先にちらっと見える‘産道’なのだろうか。出口はそっちなのに、そちらの方向には向かおうとしない。飽くまでも彼はこの凍りついた水の中で生き抜くことを選んでいる。それは、まるでこの世からの呼び掛け「ようこそ(Welcome Home)！」に敢えて背を向けるかのように…。

確かにこの天使のように愛らしい子どもマークはやることなすこと小悪魔のようで、実に言うなれば誰にとっても‘招かれざる客’とも言えた。落ち着かない、誰にも懐かない。頑なに背を向けている。この「悲傷の魂」、その個性を憐れんで、心が打ち砕かれそうになりながらも、養父母はその耐え難い思いに耐えた。自暴自棄となって死の淵へと身を投げんとする彼をこの世に繋ぎ留めようと懸命に尽力した。彼には自分の悲しみやら傷つきに心底泣いてくれる誰かが必要だったのだ。ふとここでアンデルセンの童話「雪の女王」を思い出す。雪の女王に攫われて雪の城に幽閉されたままのカイという男の子がマークと重なる。そしてそのカイを捜し求めて旅を続け、ついに氷の城に幽閉されていた彼を尋ねあてる、幼なじみのゲルダという女の子。そしてカイの心臓に突き刺さった氷の棘が、ゲルダの涙で溶け、愛は蘇える。そして雪の女王(死)の呪縛から解き放たれるのだ。このゲルダと彼の養母アニーとが重なりはしないか。どれほど涙を彼のために流したろう。でもいつかそれも熱い嬉し涙に変わっていた！因みに、カイが雪の城で女王に与えられた課題があった。それは氷の破片で「永遠」ということばを綴りなさいというもの、それができたときに解放してやると言われていた。ゲルダの涙でカイのなかに刺さっていた氷の棘、それはそもそも悪魔がつくった鏡のガラスの破片であったわけだが、それが溶けたとき、なんと突如として目の前に「永遠」ということばが出来上がっていた！この場合、「永遠」というのは「愛」だということがわかる。それこそが頑なに凍りついた心を溶かすのだ。愛は言うなれば、「おかえりなさい(Welcome Home)！」の言葉でもあろう。かくしてマークはようやくにしてかつて絶望のなかで熾烈に希求した‘お家 home’を得たのであり、養父母はその彼をついにわが胸に取り戻したといえよう。

ここでぜひ補足しておきたいことは、最後のセッションの終わりに、わたしがマークに語りかけたことば<・・わたしたちのどちらも死んではいない。われわれのどちらも消耗しきって、もはや空っぽということでもない。君も、それにわたしだってそう、これからまだまだ生きて、やらねばならないことを続けてゆくでしょう・・>は決して慰め言ではない。これは言うなれば、わたしから彼への‘任務引継ぎ’である。すなわち、マークの「おとなの部分」に呼びかけたのである。いつかその彼が己の「子どもの部分」をしっかりとお世話できるようにと・・。「死の衝動」に打ち砕かれそうになる瞬間に、「生の衝動」が息を吹き返すことがあるとしたら、それが何故にそうなのか、彼は幾らか身につけたはず。つまりは内なる‘一蹴り’である。「生きて！」という内側からの‘促しの声’を聞くことだ。「良き内的対象」ともいえようが。彼は生きて尚も煩悶を続けるだろう。生きるとは何かと・・。取り敢えずは、幼い彼がどうにか辿り着いた「いのちの旅」、すなわち「アニヤゴン(宇宙生命)」に抱かれていることを信じることなのだろう。そして自分が生かされていることが「神の恩寵」として実感され、その‘いのちの絆’を握って離さないこと。飽くまでもそれを拠りどころに、決して迷子になろうとしてはならないこと。そのためには<あなたがいってくれて良かった>と呼び掛けてくれる誰かとの出会いにマーク自らが常に開かれてあることだと知ってゆくに違いない。

マークについてわたしが一つ不思議に思うことがある。彼は診断面接の際に、主治医のDr. Walkから「3つのお願い」を尋ねられた。その返答が、自転車、モーターバイク。それはいかにも男の子らしい。でももう一つ、<お母さんに服を作ってあげるためにミシンが欲しい>というのは聞いたことがない。だが、これこそがこの子のなかの掛け替えのない‘値打ち’だ、とわたしは直観的に思った。この「ミシン」とは象徴的には、おそらく「修復する父親ペニス」であろう。つまり養母のアニーがどれほど彼のせいで心掻き乱されていたか、まさしく心はずたずたに破れていた(ハートブロークン heart-broken)のであった。それを彼は知っていた。そしてそのハートの破れ目をなんとかして縫い直してあげなきゃということがあったのだろう(!)。彼の心の傷つき、それを一緒になって傷ついてくれた、養母アニーの涙が導きであったろうか。でもまだセッション開始前の時点では、たとえそれを聞いたにしても、養父母は信じなかったであろう。この「ミシン」の話、おそらくDr. Walkも彼らに語っていないだろうし、わたしも彼らにそれについて言及した記憶はない。後に彼のセッションのなかで「ガレージマン」の遊びがあったが、それは明らかに消耗した「母親オツパイ」に休息を与え、そして癒す「修復する父親ペニス」であった！それもそうだが、まだセッションが始まらない前に彼がそれを内心密かに養っていたということが凄い！わたしは大きな期待を抱いた。因みに、クライン派はその「抑うつ的態勢 depressive position」を語る時、対象への思いやり(concern)というものを重要視する。これほど具体的なイメージを語った子どもがいたであろうか？とても驚きだ。母親の苦悩、その傷つきに対しての鋭い感受性、それがどこで養われたのかと思う。あの冷え切った鉄面皮のマークの心の内側で・・。その母親を思い遣る心を信じたいと思った。その対象への思いやりの芽生えにほんの少しでも手を(言葉を、そして想いをも！)添えてやろうではないか。われわれ当事者はそのようにしてマークを見守っていたといえるのではないか。

養母アニーの妊娠は嬉しい驚きである。もはや彼女は自分を憐れむことはないだろう。自分の子どもを孕めないからだだと思っていた。だから他人の産んだ子どもの母親として自分が受け入れられることを必死で望んだ。後ろめたい、疚しい思いがあったろう。傷つきは容易に癒されなかった。自信がないから拒絶に遭うとたどろたえ、尻込みするばかりだったろう。でも今や自分が子を孕めるからだということが解った。順序は逆だが、その前に子どもたちを育てられる自分であることを子どもたちから教えられていたのであり、あなたたちのお母さんにもしてもらえたと喜ぶ彼女がいる。この自信、誇り、喜びが彼女の妊娠という奇跡(！)に繋がったといえなくもない。こんなにも子どもを育てることが報われることだということを彼女は知った。自分も育てられたという思い。それは他人の産んだ子どもだろうと自分が産む子どもだろうと同じであろう。どの子も掛け替えのない‘個性’である！わたしはこの夫婦に「個人主義」の‘成熟’というのを見る思いがする。夫婦であろうと親子であろうと、それぞれが個性としてある！彼らはこれからどんな家族になってゆくのだろう。まだまだ傷つくことも傷つけられることもあろうが…。子どもらは一人ひとりそれぞれに大人になってゆく。お互いに助けるだろうし、助けられるだろう。

ちょっとここでマークの養父の Mr.C の話をしよう。彼は見るからにインテリである。その生涯において声を荒げることなど絶対になかったろう。妻とは仲睦まじく、趣味はチェスで、時折新聞のワードパズルに目を通し、静かに時を過ごす。この穏やかな英国紳士の暮らしに突如舞い込んできた小さな‘野獣’たち、マークとジェイソンにどれほど彼が困惑したか、そのうろたえぶりが想像される。概してイギリスの良識ある男性というのは「ベストを尽くした(I did my best)」ということを真骨頂とする。だからこの子らにホームを与えると決めた以上、その目的に向けて敢然と邁進した。それでどれだけ奮闘したか。痛ましいほどに…。そして妻に劣らず傷ついた。だがマークの治療がまだ始まっていない時点で、振り返って彼は、それを価値ある体験と語っているのだからやはり偉い！ところで一方で子どもたちはというと、時を共に過ごすなかで、例えば新聞を拵げてワードパズルに興ずる父親をなにやら尊敬のまなざしで眺めるようになっていった。自分だってパパみたいになりたいと…。それぞれが触発された。それで子どもたちはチェスのプレーに興ずることを覚えた。勿論父親に手ほどきされて…。そして博物館やらギャラリー巡りといったことにも父親にお供されて出掛けることを喜ぶようになっていった。結局のところ、おそらく彼の血筋にも負けないくらいに、彼に嗜好も趣味もよく似た、賢い子どもたちに恵まれたことになる。どんなにか誇らしいことか。さらには自分の子どもを妻が妊娠した。それは小躍りせんばかりの歓喜であつたらう。いつか自分が4人の子どもらの父親になるなど想像し得なかったこと。この人生の巡り合わせにどんなに彼は感謝したろう。実にブラボー！である。

この症例がいわゆる成功例であること、それは疑わない。マークもわたしもしっかりやることをやったからだが…。つまり存分に‘ワーク work した’と言っていい。彼を「分析の子ども」として誇っていい。だが、養父母たちの流す涙がなければ、決してこの成功は為し得なかったということ、それも間違いのない事実だろう。彼らの懐にマークを連れ戻してあげる一助にわたしがなつたとしたら、とても嬉しい！そしてわたしはふと、4人の子どもらの母親となるアニーに自らを重ねて、そこに「生きられなかったもう一人の私」を見る。いいな、いいなと思う。とても羨ましい。でもなんだかすごく励まされる思いがする。違ったかたち

での違った生き方である。でもどちらにしても、いのちを育む‘親’であろうとすることにおいては同じ。わたしもわたしの持ち場で、つまり心理臨床家としてだが、尚も「贖いの器」であり続けよう。そして一人でも多くの「分析の子ども」の誕生を祝えたらいい。

(2018/03/10 記)